

今月号から、東洋大学講師の久野俊彦先生の連載がはじまります。久野先生は、民俗学の立場から寺社縁起や古典籍の研究をしており、『偽文書学入門』という本を刊行されました。「偽文書」とは成立や内容に信ぴょう性がうすい文書のことです。これまでの歴史学では、巻物や家系図も偽文書として研究の対象から外されてきましたが、久野先生はそれらが成立した理由や、伝存してきた意味を研究し解明しようとしています。只見町の古典籍や古文書を題材に6回にわたり執筆していただきます。

楮戸龍蔵院の蔵書

只見町大字楮戸の山崎行弘氏宅は、江戸時代は龍蔵院といいい、本山派修験道に属していました。同家には龍蔵院の須弥壇と本尊不動明王が残されています。龍蔵院はホウイン（法印）と呼ばれた修験寺院を数箇寺取りまとめる谷老僧をつとめました。京都の本山聖護院からの伝達は、会津若松の大先達南岳院、田島（南会津町）の小先達南照寺を経て、龍蔵院に達しました。龍蔵院のホウインもたびたび京都におもむいて修行や修学に励みました。そのため、龍蔵院には多量の書籍が集められたのです。近年、龍蔵院の蔵書が只見町に寄贈され、本格的な書籍の調査が始まりました。筆者はその撮影調査と目録作成をしているところです。蔵書は、修験道や呪術をはじめ、仏教・神道・陰陽道などの諸宗教にわたり、和歌・物語・説話集などの文学作品も含んでいます。修験道の法印の具体的な宗教活動や文化活

動を知る絶好の資料です。書籍の年代は戦国時代末期から江戸時代前期・中期のものが多く、京都の大寺院の蔵書にも匹敵する貴重なものが含まれています。この地にこうした質の高い文化が確実に根づいていたことは、地方文化を見直す点において、日本文化史上の重要な発見です。この書籍が今日まで災害にあわずにきた幸運もありますが、伝存してこられた龍蔵院山崎家の代々の方々に敬意と感謝を表したいと思います。



楮戸山崎家の「伊勢物語註抜書」

伊勢物語注釈書の古写本

龍蔵院の書籍の中から、今回は『伊勢物語註抜書』を紹介いたします。『伊勢物語』は平安時代初期に成立した和歌物語で、在原業平が主人公とされています。「唐衣きつつなれにし」の歌の「東くだり」の段で知られています。龍蔵院にはその注釈書である『伊勢物語註抜書』があります。これは雁皮紙に書かれた写本で、室町時代末期の書写と推測されます。写真の冒頭を読んでみましょう。仮名には漢字と濁点を付し、部分訳してみました。

春日野、若むらさきのすり衣忍ぶのみだれかぎりしられず。このうたは、むかし男、ならの京春日の里にしるよしして、かりにいにけり。其さとに、いなまめいたる女はらからすみけり。このをとこ、かいまみておほほす。ふるさとにいはしななくてありければ、ころまどひにけり。おとこのきたりけり。たかきぎぬのすそをきりて、うたをかきてやる。そのおとこ、しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける。みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに、みだれそめにし我ならなくに。とゆふうたのころばえなり。むかし人は、かくいちはやくみやびをなんしける。是はふるきうたなるを、彼まめをとこ、こゝにとりあわせて返しけんとなんしけるなり。これは『伊勢物語』の第一段ですが、文末の「是はふるきうた」以下は一般の『伊勢物語』にはなく、注釈の言葉が本文に入り込んだものです。修験道では、呪いに和歌を多く用いるため、呪術書には和歌がたくさん書かれ、和歌や物語の知識が必要でした。和歌や物語の注釈書から得た知識と教養を持って、ホウインが村人に呪術や説教を行っていました。村人はホウインによって文化的影響を受けたと考えられます。奥州の山間地に和歌や物語が根づいて社会的に機能し、その古写本が存在していたことは、日本文学史の盲点であり、今後の研究が待たれます。